

# 仕合わせの和



第217号

令和2年 4. 1  
(毎月1日発行)

しゃくそん ごこうたんえ  
釈尊・御降誕会

住職 谷川寛俊

形が太陽の回りの光線に似ているところから「コロナウイルス」と名付けられたとか。太陽もさぞかし不名誉なことでしょう。「コロナ」という名の「疫病(えきびょう)」は、流行病のことで、今度の流行は世界規模の世紀の大疫病であります。地震や風水害は既に経験済みですが、未だに感染源も分からず、しかも目に見えない敵といつまで闘わなければならぬのか。思うに、これは我々人間世界に何かを求め、そして何かを試められているのではないかと思うのは私一人でしょうか。これは目に見えない世界からの警鐘と受け止める時、「疫病退散」の御祈願を致しておりますが、どうか皆様も一日も早い終息をお祈り下さいますようお願い申し上げます。

今から二千五百年前、釈迦族の王子としてインドに誕生されました。富と名誉と権力を自由にできたにもかかわらず、豊かな暮らしに溺れず、悟りを求めて出家し、ひたすら修行に励まれたのです。その生き方から見えてくるのは、お釈迦様が求めた幸福とは、裕福になる事や、名声を得ることではなかったという事です。お釈迦様は「この世の一切(全て)は苦である」と説き、その代表的な苦しみとして、生老病死の「四苦」を挙げられました。私達が人間として望むのは、何時までも若く、常に元気で長生きしたいということですが、しかし実際はどうでしょうか。いずれ私達は年をとり、時には病気になる、そして必ず死を迎えます。出来れば避けたい老病死ですが、残念ながら誰も逃れることは出来ません。そもそも、この世に生まれてきたことが、老病死の始まりなのです。先月号にも少々触れましたが、この世に生まれ合わせたということは、よほどのご縁があって、またその人にし

か出来ない使命を持って生まれてきたということですが、誠に大切で尊い存在なのです。しかしながら一切は苦であるという考え方は、あまりにも悲観的で、夢や希望が感じられないと不満に思う人もいらっしゃるかもしれません。でも私達の周りで起こる出来事を冷静に観察すれば、自分の思い通りにならないのが現実です。またこの世に実在する全てのものは止まることなく変化し続けていて正に「諸行無常」です。永遠に変わらないものなど一つもありません。その厳しい現実を受け止めて、またそこから目をそらさず、幸福を考えるのが仏教です。お釈迦様が求めた幸福は、この四苦をはじめとする一切の苦しみから解放されることでした。どんなに裕福でも「もつと贅沢(ぜいたく)したい」と願う人は、今の豊かさには満足できません。「もつと、もつと」という欲望がある限り、いつも飢(う)えていて、満たされることがないでしょう。

お釈迦様の教えの一つである「少欲知足(欲望には限りがない為、足(た)ることを知る)」という思いが大切なのだよ」と、目に見えない敵からの訴えなのかも知れません。

